

クムガンサン
金剛山のとら

ちようせんはんとう
(朝鮮半島)

昔^{むかし}むかしのことです。^{*}金剛山に悪いとらがいて、人をとって食うというので、村人たちはみんなおそれていました。

あるとき、うでのいい獵師^{*りようし}が、金剛山へとらを退治^{たいじ}しに出かけていきました。山のふもとまで来ると家が一軒^{いっけん}あって、ひとりのおばあさんが住^すんでいました。獵師はその家に泊^とめてもらいました。

つぎの朝、おばあさんは獵師に、七日分の焦げ飯^{*こめし}をべんとうにくれて、

「あんだ、どこへ行くんだい」とききました。

「金剛山へとらを退治しにいきます」と、獵師が答えると、おばあさんは、

「それは止^やめたほうがいい。この山へ入った人は多いが、帰ってきた人はひとりもないよ」といつて止^とめました。けれども、獵師は耳をかさず、山へ入っていきました。そして、それっきり、二度^{にど}ともどつてきませんでした。

さて、この獵師には、男の子がひとりありました。男の子は八歳^{さい}になったとき、母親に、

「ぼくのお父さんはだれなの。お父さんはどこにいるの」とたずねました。母親が、

「おまえのお父さんはなくなったんだよ」というと、男の子は、どうしてなくなったのか教えてくれとせがみました。そこで母親は、

「おまえのお父さんはうでのいい獵師だったけれど、ある日金剛山へとらを退治しにいつて、そのまま帰ってこないんだよ」と話しました。

男の子は、それからというもの、毎日、朝暗^{くら}いうちから鉄砲^{てつぽう}を持^もってどこかへ出かけ、夜暗くなつてから帰ってくるようになりました。男の子は、こっそり、鉄砲の修行^{しゅぎょう}をしていたのでした。

三年たったある日のこと、男の子は母親に、

「これから、金剛山へお父さんのかたきうちに行きます」といいました。母親は、

「だめだよ。おまえのお父さんは、わたしが十里^{*り}むこうで頭に水がめを乗^のせて立っていると、その水がめの左の取^と手を鉄砲でうち落^おとすことができた。それだけのわががあつても、とらに食われてしまったんだよ。おまえにどうしてかたきがうてるものか」といいま

した。男の子は、母親を十里むこうに立たせて水がめの取っ手をうつてみましたが、たまは当たりませんでした。そこでまた修行を続けました。

三年たつと、男の子は、ようやく水がめの取っ手をうち落とすことができるようになりました。けれども母親は、

「まだだめだよ。おまえのお父さんは、わたしが十里むこうで針を持って立っていると、その針の頭をうち落とすことができたんだ。それでもとらに食われてしまったんだよ」といいました。男の子は、やつてみましたが、針の頭をうち落とすことはできませんでした。そこでまた修行を続けました。

三年たつと、男の子は、ようやく針の頭をうち落とすことができるようになりました。そこで、とうとう母親のゆるしを得て、金剛山に向かつて旅立ちました。

山のふもとまで来ると、男の子は、あのおばあさんの家に泊めてもらいました。おばあさんは、

「あんたのお父さんは、鉄砲の名人だった。十里むこうのあの高い木のでっぺんの葉っぱをうち落とすことができたんだよ。やってごらん」といいました。男の子は、みごとに葉っぱをうち落としました。おばあさんは、

「まだだめだよ。あんたのお父さんは、十里むこうの岩の上をはっているありをうつことができたんだ。岩には少しもきずを付けずにね」といいました。

男の子はやつてみましたが、ありをうつことはできませんでした。そこで、また修行を続け、三年たつと、ようやく十里むこうのありをうつことができるようになりました。男の子は、そのときにはもう、りっぱな若者になっていました。おばあさんは、喜んで、若者にたくさん焦げ飯を持たせて金剛山へ送りだしてやりました。

若者は、焦げ飯をかじりながら、金剛山のおく深く入っていききました。

ある日、若者が、岩にこしを下ろしていっぷくしていると、ひとりの坊さんが近づいてきて、

「たばこの火をかしてくれないか」といいました。若者がたばこに火を着けてやろうとして、ふと坊さんの口もとを見ると、とらのきばが生えていました。そこで、鉄砲で一発、若者は坊さんの胸をうちました。たちまち坊さんはとらになってたおれました。

若者は先へ歩いていきました。すると、畑でひとりのばあさんがいもをほっていました。

若者が、

「おばあさん。お腹がすいたので、そのいもを少しだけませんか」とたのむと、ばあさんは、ふり向きもしないで、

「いや、そんなひまはないよ。今、うちの人のたましいがやって来て、悪者に殺されたから、すぐにいもを食わせて生き返らせてくれといったんだ。早くいもを持って行ってやらないとだめなんだよ」といいました。若者が、（これはあやしい）と思ってよく見ると、ばあさんの手はとらの足でした。そこで、鉄砲で一発。ばあさんは、とらになってたおれました。

若者がまた歩いていくと、むこうから、美しい女の人が、頭に水がめを乗せてやって来ました。若者が、

「のどがかわいたので、その水を少しだけませんか」とたのむと、女の人は、

「いや、そんなひまはないよ。今、うちのおじいさんとおばあさんのたましいが来て、悪者に殺されたから、すぐに命の水をくんできて生き返らせておくれといったんだ。早くこの水を飲ませないとだめなんだ」といって、行ってしまいました。見ると、うしろすがたはとらでした。そこで、鉄砲で一発。女はとらになってたおれました。

さらに歩いていくと、若い男が急いで山を下りてきました。若者が、

「ねえ、たばこの火をかしていただけますか」とたのむと、男は、

「いや、そんなひまはない。今、うちのじいさんとばあさんと妻のたましいが来て、悪者に殺されたから、早く祭りをして生き返らせてくれといったんだ。早く家に帰って祭りをしないといけないんだ」といいました。よく見ると、男の足のあいだから長いしっぽがたれていました。そこで、鉄砲で一発。男はとらになってたおれました。

若者は先へ歩いていきました。すると、山のように大きなとらが現れました。とらは何千年も生きていて毛がまっ白になっていました。とらは、大きな口を開けて若者を飲みこもうとおそいかかってきました。若者はその口めがけて鉄砲をぶっ放しました。けれども、たまは歯に当たってつぎつぎにはね返されてしまいました。とうとうたまがなくなると、とらは、若者をひと口に飲みこんでしまいました。

とらのお腹の中は、ひとつの村がすっぽり入るほど広く、あちらこちらに、とらに食われた人間の骨が散らばっていました。若者は、その中に父親の鉄砲と骨を見つけました。

そこで、父親の骨を拾^{ひろ}つてふくろに入れました。

少し行くと、美しい娘^{むすめ}が氣^{うしな}を失^うつてたおれていました。若者が手当てをしてやると、娘は目を覺^さました。

「わたしは、大臣^{だいじん}のひとり娘です。ある晩^{ばん}、髪^{かみ}をあらおうと庭^{にわ}に出たところへ、大きな白いとらが現れて、わたしを飲みこんでしまったのです」

若者は、

「では、なんとかして、いっしょにここから逃^にげましょう」といいました。

ふたりは、とらのお腹の中をあちこちさがして、小刀^{こがたな}をひとつ見つけました。若者がそれでとらのおしりの穴^{あな}を少し切ってみると、外の世界^{せかい}が見えしました。娘がそこから見張^{みは}つているあいだに、若者は小刀でとらの横^{よこ}つ腹^{はら}を切りはじめました。

とらは、急^{きゆう}にお腹がいたくなってきたので、山の神さまのくまの所^{ところ}に行つて、

「神さま、お腹がいたくてしかたがありません。何か薬^{くすり}をください」とたのみました。くまは、

「では、果物^{くだもの}を食べればよからう」と教えました。とらは、山のりんごやなしを手当たりしだい取つて食べました。若者と娘は、ちようどお腹がすいていたところへ、果物がどんどん降^ふってきたので、これ幸^{さいわ}いと、かたつばしから食べました。

とらは、ますますお腹がいたくなって、またくまの所に行つて、

「もっとよくきく薬^{くすり}をください」とたのみました。

「では、命の水を飲むとよからう」

とらは急^{いそ}いで泉^{いずみ}へ行つて命の水を飲みました。若者と娘は、ちようどのがかわいていたところへ、命の水がどんどん降^ふってきたので、これ幸^{さいわ}いとがぶがぶ飲みました。ふたりはますます元氣になりました。

とらはあまりのいたさに、飛^とんだりねたりしながら野山を走りまわり、とうとうたおれて動^{うご}かなくなっていました。娘がとらのおしりの穴^{あな}から外をのぞくと、広い野原が見えしました。そこで、若者は、とらのお腹をすっかり切り開^{ひら}き、ふたりで外へ出ました。そして、とらの皮^{かわ}はいでうちへ持つてかえりました。

母親も村の人たちも大喜びでした。大臣も喜んで、娘を若者と結婚^{けっこん}させました。若者は、一生幸^{しあ}せに暮^くらしました。

＊ 金剛山 朝鮮半島ちようせんはんとうにある山。

＊ 狛師 鳥やけものをとる仕事しごとをする人。

＊ 焦げ飯 ご飯はんをたいたときに釜かまに焦げついているおこげのご飯。

＊ 里 朝鮮半島での距離きょりの単位たんい。一里は約やく一キロメートル。

出典 『語りの森昔話集2ねむりねっこ』村上郁再話／語りの森